



# 子どもの日



指宿市長  
豊留悦男

すっかり夏の陽気となった5月、この季節に深みを増す緑は「青葉」「青田」「青柳」と「青」で表現されます。

山々の草木の葉にざわめきを起こす風は「青嵐あおあらし」、やがてやってくるのは「青梅雨あおつゆ」です。青々とした山野はみなぎる生命力の表れです。

さて、子どもの頃、よく歌った唱歌に「背くらべ」があります。

柱の傷はおどしおどし 五月五日の背くらべ  
ちまきたべたべ兄さんが 計はかってくれた…

と、よく歌っていました。この歌を作詞した海野厚うんのあつしは7人兄弟の長兄です。

後に、海野氏の弟が「あの歌は、私たち兄弟姉妹のことを歌ったものです」と語っています。きつと兄さんが、弟たちに背丈の印を柱に付けてあげたのでしょうか、仲むつまじい様子が浮かんできます。

私たちが小学校の頃の教科書には「背くらべ」が載っています。

ましたが、現在の教科書にはないとのこと。どうやら少子化の進行と無縁ではないようです。一人っ子が増え、内容が時代にそぐわなくなったのかもしれない。

子どもの数は本市においても毎年減少しており、学校の風景からも少子化の深刻さは驚くばかりです。子育ての経済的負担や女性が子育てしながら働ける環境が整っていないことなど、さまざまな要因があるようですが、鯉こいのほりかしむちを揚げ、ちまきや柏餅かしむちを食べながら、子どもの健やかな成長を願っていた頃を懐かしく思い出しています。

子どもの声、それが泣き声であったとしても何だか安心するものです。

最近、保育園などの建設に対してトラブルが起こる事例もあるらしく、今や小学校や公園なども含め迷惑施設と受け止められているのは、いささか残念な気がします。もち

ろん自らの生活の快適さを求めることも大切にすべきでしょうが、子どもがのびのび育つ所こそが住みやすい地域のように思います。

何ぶしだ などと 泣な子を しれさせる

と、江戸川柳にあります。子どもが泣くと父親は「いい声だね、それは何節だい」と、子育てを楽しむ親の大きさが感じられます。

江戸時代の親は「子どもは泣くのが商売」と心得ていたようです。

兄妹が背丈を計り合い柱に記す、そんな光景を懐かしく思い出す「子どもの日」です。

